

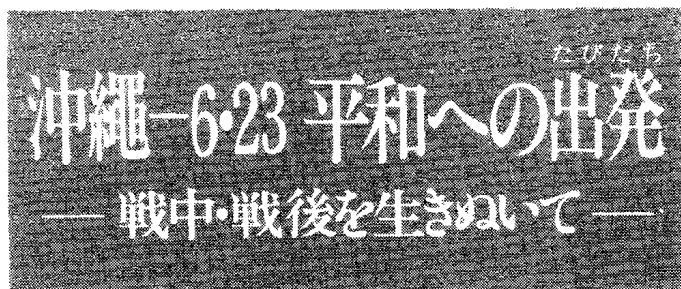
戦争を知らない世代へ ④8 沖縄編

たびだち
沖縄—6・23 平和へ—の出発
— 戦中・戦後を生きぬいて —

創価学会青年部反戦出版委員会

第三文明社

戦争を知らない世代へ ④8 沖縄編



創価学会青年部反戦出版委員会

第三文明社

戦争を知らない世代へ④

沖縄—6.23 平和への出発—戦中・戦後を生きぬいて

昭和54年6月23日 初版第1刷発行

編者◎ 創価学会青年部反戦出版委員会

発行者 栗生一郎

発行所 株式会社 第三文明社

郵便番号 101 東京都千代田区猿樂町2-5-4

振替 東京5-117823 電話03(294)8731(代)

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 株式会社星共社

落丁・乱丁はお取り換え致します

0036—7048—4438

1979 Printed in Japan

発刊の辞

昭和四十九年六月二十三日、創価学会沖縄青年部が戦争体験出版の第一号として、「打ち砕かれしうるま島」を上梓してから早や五年の歳月が過ぎた。

生命を至上の尊厳なるものとするのが仏法である。その仏法を根幹とし、平和・文化運動を推進する創価学会青年部が、「生存の権利を守る青年部アピール」を採択したのが同じ四十九年の一月二十日の第二十二回青年部総会であった。沖縄青年部はこのアピールに基づき、具体的な平和運動の第一歩として、沖縄戦の体験を戦後世代が収録することにより、二度と同じ道を歩まないための平和勢力拡大の起点とすべく取り組みを開始した。

それ以後、各地の戦争体験が全国の青年部の手によって、庶民の赤裸々な戦争否定の叫びとして掘り起こされた。

その中で沖縄編は、これで五冊目となる。数多くの庶民群の証言記録によって、沖縄戦とは何であったかが、われら戦無派にもはっきりとみえてきた。

国家という名の下に戦争はつねに大義名分化されてきた。その国家とはいったい何なのか。それを見抜く自立した庶民の明確な意思がなければならない。つまり国家という名の背後にそれを動かす勢力があるということである。その勢力といえども個々の人間の集まりである。その生命に巣喰う権力の魔性こそが、戦争という惨劇をあたかも殺人ゲームのごとくに人間をして凶暴化せしめるのである。

沖繩戦の特徴は何といっても非戦闘員の犠牲である。その犠牲は敵、味方の図式からくる敵による犠牲だけではなかった。同胞である日本兵の自己防衛本能は、非戦闘員の殺戮という惨劇を現出させ、それによって戦争という残酷さをことさら庶民の体に、目に刻印するものとなった。この沖繩戦という情況の延長線上に今の沖繩の現実があるし、それが軍事基地の中に沖繩があるという表現となって顕れている。この現実を直視するとき、沖繩戦の実体を断じて風化させることなく継承し、平和構築への粘り強い戦いの起点にしていくのが今を生きる若者の責務であると考え。表面的な平和ムードの中で有事立法、憲法改悪等、戦争への胎動は私たちの周囲に日常的に進行していることは確かである。

日本国憲法の前文には、「日本国民は、恒久平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであって、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した」とある。今こそ、この平和憲法の問題が人類共通の問題として昇

華され、生きた力となるために、日本国民一人ひとりが人間として何をなさねばならないかを、真剣に思索せねばならないときである。そのために、人間とは如何なる存在であるかをとらえた不変の生命哲理と、この戦争体験に収められた「これが戦争というものだ」という無辜の庶民の心奥からの叫びを、反戦行動へのバネとしていかねばならない。

こうした種類の戦争体験記がよいよ青年層に、就中、未来世代の高・中・小学生等に読みつがれ、生きた平和教育の教材となつてほしいと願わざるを得ない。そのような教育こそが人間とは何か？ 国家とは？ 生存の権利とは？ という根源的な問いかけに答え、何故に生命が尊厳なのかが具体性をおびて子供たちの胸に迫っていくものと信ずる。

そうした教育があつて、はじめて今後の人類の未来における生存の権利の保障がなされるのではないかと考える。ますます深刻化する核戦争の脅威の下にあつて、地球が壊滅することがあればどんなに文明、科学技術が発達しても、元も子もなくなつてしまう。近代戦争の歴史は、どれだけ数多くの人間を瞬間にして殺傷できるかの効率を競つてきた。

「メガ・デス」(百万人を殺すことのできる核物質の量の単位)という言葉にみられるように人間の物質化がその言葉の背後に露呈されている。地上の生きとし生けるものすべての死滅が、近代兵器によって用意されているのである。

我々は個の生存の保障のためにも、何にも優先し、自分自身のおかれてゐる部署においてあら

ゆる戦争の動きに対する歯止めの戦いを起こさねばならない。その戦いがあってのみ、自己の生存が保障されることを深刻に受けとめていかねばならないと思う。

めざめた庶民群の平和構築の連帯あってこそ人類の未来に希望という二字が輝くことを確信する。この戦争体験集は沖縄戦の戦中から終戦、特に戦後という国破れた山河に庶民の再建の戦いがいかに至難な忍苦のものであったかに力点がおかれている。『ゼロからの再建』という沖縄史の一頁を知る上においても貴重な資料となっている。この原体験を多くの青年の生きざまの基軸にすえていく反戦運動のさらなる戦いの幕明けとしていきたい。そのことがこのシリーズに協力をおしまなかつた方々に最大に喜んでもらえることにもなる。

沖縄戦、終戦三十四年目の六月二十三日に、創価学会青年部沖縄県反戦出版委員会の手によって、本書が発刊できたことに心から敬意を表するものである。

最後に本書の上梓に多大な協力をしてくださった全国反戦出版委員会のメンバー、及び第三文明社の方々に、心から謝意を表するものである。

昭和五十四年六月二十三日

創価学会青年部

沖縄県青年部長 三盛洲洋

目次

発刊の辞

第一章 焦土の沖繩

敵は日本兵だった……………	又吉トヨ	11
出征の不安と焦土の沖繩……………	前田ヨシ子	18
力を合わせて、ゼロから出発……………	川上亀善	26
マラリアから救ってくれた青豆……………	野原長一	32
多くの人が不発弾で死亡……………	清元菊枝	40
家族離ればなれの逃避行……………	花城三郎	47

第二章 食糧不足とマラリア

収容所生活に明け暮れた青春……………	岸本美美子	57
草の葉やソテツも食糧に……………	知念栄松	62
娘ふたりを女手ひとつで……………	上間梅子	69
戦争の傷跡と離島の二重苦……………	当山松治	72
珍スタイルで軍作業へ……………	与座永裕	76

歩けない老人は山に置き去り……………	比嘉秀子
墓を防空壕代りにして……………	知念盛仁
	95 85

第三章 捕虜収容所から

四年余のシベリア収容所生活……………	富永吉次
死を覚悟に生き延びる……………	村上ハマ
『ワチャク』された三十年の人生……………	大山岩信
赤道を南下した戦争……………	大見謝松金
カンカラ三味線の音が勇気に……………	佐渡山安喜
廃虚の中で紅型再興に生きる……………	大城貞成
戦災孤児になって……………	宜保新一
メリケン粉袋がワイシャツに……………	幸地和子
	152 148 142 135 129 122 116 105

第四章 戦争と教育

収容所の青空教室から始まった……………	比嘉徳仁
奪われた就学期、そのツケは今も……………	安里安盛
生きる気力を与えてくれた三味線……………	当山正助
	173 168 161

恩師の教えが生きる勇氣に……………	知念ツル子
子供の埋葬が収容所の日課……………	儀間朝善
一瞬、静閑な学園が戦場に……………	喜屋武長盛・春子

188	183	178
-----	-----	-----

座談会 沖繩編にみる反戦の願い

あとがき

年表・沖繩戦中戦後史

沖繩戦戦図



第一章

焦土の沖繩

敵は日本兵だった



又吉トヨ（60歳）

今の日本は平和な国だ。まるであの忌まわしい戦争の爪痕などなかったかのように。平和な今の時代ではとても信じられないことかもしれない。「マサカ!? ソンナコトガアッテタマルカ!」といわれるかもしれない。だが沖縄の戦争は、まさに「狂気の沙汰」が毎日のように、しかも平然と行なわれていた。

わたしの体験した戦争は敵も味方もなかった。無差別にして、しかも冷酷を極めたものだった。いつ殺されるかわからない恐怖。どこに行っても付きまとう不安。誰を信用し誰を頼ってよいのかわからない、すべてが混乱した状況――。

わたしは戦後三十四年経った今でも、テレビや映画に映し出される「戦争もの」は見たくない。顔をそむけてしまうのだ。あんなものはみんなウソでうわべだけのものだと思ってしまう。なぜなら、体験した者でないとわからないだろうが、戦争によってひき出されるドロドロした人間の

醜さや、それこそ生死の境目を渡った恐怖は、まるっきりボカされているからだ。

現実はずっと恐怖に満ちたものだったし、そして何よりも耐え難い苦しみのもだった。所を追われ、暗い闇の中、幼な子を抱いて逃げ回った山道。食べる物もなく、小さな子供たちの飢えた顔。あの悪夢の出来事が、まるで昨日のことのように鮮明に浮び、茫然となってしまう。

中でも忘れられないことは、わたしたちを助け、国を護るはずの日本兵のひどい仕打ちだった。『一体何を信じたらいいのだろう!?』——わたしたちは、それこそ『友軍という名の敵軍』にいいめられてきた。安全な所へ避難するからと、言葉巧みに騙されて、祖母、義妹、わが子を殺されてしまった。何の抵抗もできず、逃げることできないわたしたちに、その日本兵たちは銃口を向け、手榴弾を投げた。食糧はもちろんのこと、わたしたちのみすばらしい家財道具までも奪い取られてしまった。また、防空壕で避難している時など、赤ん坊でも泣き出そうものなら、無理矢理その若い母親から奪い取り、外で真っ先に殺されるのだ。得体の知れない不安に泣きじゃくる赤ん坊に、生きる権利は与えられなかった。そして、自分の身だけ守るために行動した日本兵は、さもあたりまえのように帰ってきて、ひとり悠然としていた。そんな行状は数えあげればきりが無いほど、日常茶飯のことであった。そんな体験から今でも自衛隊などの『軍服姿』を見ると、どこに向けたらいいのかわからない、激しい「憤り」が込みあげてきてしまう。

昭和十五年、わたしが二十一歳、夫が二十三歳の時結婚し、城間ぐすくまにある夫の実家の近くに暮らしていた。長男が四歳、次男が十カ月の昭和十九年十一月、夫は徴集された。僅か五年たらずの結婚生活だった。ちょうどその頃から戦争が激しくなり、避難命令が出ていた。

昭和二十年二月八日、義母の実家がある国頭くにがみの辺野喜べのきを目指して、義母と長男、次男、そしてわたしを含めての疎開が始まった。家財道具を馬車に乗せ、北へと進んだ。北へ向かう道々には、那覇や南部から疎開する人たちでいっぱいだった。上空からは敵機が何度も襲撃し、やっとの思いで、五日目に辺野喜に着いた。

山と山に囲まれたその小さな部落は安全だと思ったのも束の間、すぐさま空襲を受けた。四月になったある日、「米軍が上陸した」という情報が流れた。居あわせた日本兵はみんなの動揺を静めながら、「日本は勝っているんだ。だが用心のためにも、ここは味方が少ないから中頭なかがみへ行く」と呼びかけていた。にもかかわらず、中頭への移動は五月になってからのことだった。

祖母と義母と義妹、加えてわたしたち家族三人の計六人は、中頭へ行くみんなの後について行った。部落からはトラックが出ていて、何度も「乗りなさい」といわれたが、人数が多かったし、トラックだと目立つと思った。しかもどこに連れて行かれるかわからないということで、歩いて行くことに決めた。まったくの暗闇の中での行進だった。それでも、暗闇の恐ろしさより、いつ

敵に見つかって襲われるかわからない恐怖の方が数段重くのしかかってきた。途中、西海岸は上陸した米軍がいっぱいだということで、山を突っ切って東海岸に出るつもりだった。

ところが、道中不案内のうえに、敵を恐れての暗闇の行進だったために、いつの間にか西の大宜味村すみせんの塩屋に出てしまっていた。みんなの不安が募らないはずはない。わたしたちは仕方なく近くのトヌジャー（現在の白浜）という誰もいない小さな島に身を潜めることにした。空腹を癒すにも食べる物もなく、かろうじて畑の小さなイモで飢えをしのいだ。

夜もふけ、空家で寝ていると、山から降りてきたのであろうか、日本兵が真っ暗な浜辺へ集合し始めた。アメリカ軍の目を逃れるには夜を徹して逃げるしかない、との打ち合わせをするためだった。ところが、いつまで経っても何の話もなかった。不審に思い闇を透かして見ると、日本兵が整列して銃を構え立っているのが見えた。

「あっ」という間もなく、「一、二の三！」の合図で、わたしたちに向かって発砲してきた。そのうえ手榴弾も投げ込まれ、そこにいた人たちはバタバタ倒れていった。

ちょうどその時だった。塩屋の方から照明弾があがり、日本兵はひとり残らず逃げていった。わたしは幸い大きなケガはなかったが、長男は足に五力所弾を受け、次男と、次男を抱いていた義妹は頭と脇腹に傷を受け、また義母はかかとに傷を負っていた。祖母はこめかみに弾があたり、即死だった。